

鼎談後記

# 「オオカミ少女はいなかった」

内田伸子（鼎談 オーガナイザー）

【講演】

鈴木光太郎（新潟大学）

【コメンテーター】

榊原洋一（お茶の水女子大学）

【オーガナイザー】

内田伸子（お茶の水女子大学）



学術集会の締めくくりに人間発達に関わる研究者3名（鈴木光太郎[実験心理学]、榊原洋一[小児神経学・小児科医]、内田伸子[発達心理学・認知科学]）が遺伝と環境をめぐり鼎談した。

●鈴木氏は2008年9月に『オオカミ少女はいなかった—心理学の神話をめぐる冒険』（新曜社）を上梓された。オオカミに育てられた2人の少女、アマラとカマラ。発見当初は四つ足で歩き、生肉を好み、オオカミのように吠える。夜中でもランランと光る目玉、素早く走りまわり、木にも登る……今でも道徳や家庭科の教科書に載り、まことしやかに実話の如く、有識者と言われる人すら審議会などで語る。実はこの話は真っ赤なウソであり、成熟主義者のゲゼルが環境主義・行動主義に宗旨替えるための免罪符として使ったデータ捏造の産物だった。しかも写真まで下手な捏造がはっきりわかるお粗末な代物。「人間発達に成育環境は大事」ということを言うためのフィクションとしてもあまりにもお粗末であり、まともな発達心理学者は一顧だにすらない代物である。にもかかわらず、有識者と言われる人すら、まことしやかに、見てきたように、学術審議会などで声高に披露する。とうてい人間発達について考える者たちは、「お粗末な物語」と笑って見過ごすわけにはいかない。データ捏造の意図は悪質きわまりなく、「犯罪」の域にあるのである。本書は、心理学界で囁かれている9件のデータ捏造のからくりを見事に検証し、謎解きをしてみせている痛快な書である。出版されるやたちまちベストセラーになった。この著者にご登壇いただき神話の呪縛から解放される術について存分に語っていただいた。

●榊原氏は、2004年7月に、『子どもの脳の発達—早期教育で知能は大きく伸びるのか』（講談社）を出版してベストセラーになった。鼎談では、子どもの脳の発達の臨界期・敏感期について脳科学・小児神経学の科学的知見に基づき現代の脳科学ブームが人々に新たな誤解と神話を生んでいることについてデータに基づき展開していただいた。

●内田は、2007年2月に『子育てに「もう遅い」はありません』を出版し、子育てに悩む親からのウェブ相談室を開設した。育児不安に陥り、早期教育や受験塾に幼い子どもを駆り立て、子どもをいじり回し、ダメにしてしまう母親。小さい肩に母親の過剰な（異常な）期待を背負いこんで早期教育に駆り立てられ、文字や計算を強いられているうちに言葉を失い、心身症に陥ってしまう子どもが増えている現状をなんとかしてはならないという思いから、ウェブ相談室を開設した。本書を出版して延べ120件以上の相談が寄せられ相談室は結構忙しい。母親たちには発達心理学の科学的知見を踏まえて母親たちに、待ち、みきわめ、急がない、急がせないで子どもと共にふれあいを楽しむこと、共有型しつけの大切さを説いている。鼎談では、内田が関わった5歳、6歳になるまで育児放棄され、極度の発達遅滞に陥った姉と弟のきょうだいの20年に及ぶ補償教育・追跡研究の結果を踏まえて、環境を改善してキャッチアップできた領域と生物学的臨界期の壁をどうしても乗り越えられなかった領域についての話題を提供し、人間発達に及ぼす遺伝と環境の影響を再考した。

鈴木氏の講演に次いで、内田、榊原氏の指定討論が行われ、三者が壇上で、鼎談した。さらにフロアを巻き込み、活発な議論が展開した。フロアの皆様からの多くのご発言をいただいたことで鼎談は成功したのではあるまいか。

